

直木三十五全集

13

直木三十五全集

13

江苏工业学院图书馆
藏书章

直木
說集

下

示人社

直木三十五全集第13卷

平成三年七月六日発行

編纂協力 直木三十五全集刊行会

発行者 宗 野 信 彦

発 行 所 東京都文京区水道一―九一―
株式会社 示 人 社

郵便番号 一―二―

電話 東京三八二二―二四一三

印刷 モリモト印刷株式会社

製本 装幀 イワサキ・ミツル

落丁・乱丁本はお取替致します

本文及び口絵写真は改造社版直木三十五全集
第13巻（昭和10年5月18日発行）を用いた。

第十三卷目次

新釋四谷怪談	三
勘平切腹	一九
輕輩血笑記	三三
鳥眼	三七
贈る血汐	九
血笑死笑	九
酒徒、討たず	二四
戀が敵	二三
寛永武道鑑	二七
涙する鳥眼	一五
討入	一六
羅漢を見た爲めに	一八四
浅香崩れ	一九一

伊右衛門の自裁	二二〇
鰻で討つ	二二七
八荒流騎隊	二四二
持て餘した仇討	二五六
川中島	二七一
總穩寺の相討	二七九
大阪落ち	二九〇
宮本武藏	三〇三
相馬の仇討	三一四
劍戟八景	三二二
醒が井宿の仇討	三三九
平六成功奇談	三三五
河合又五郎に話を聞く	三四九
辨慶と九九九事件	三五五
煙突風景	三七四

常盤の貞操	三七七
戦争と花	三八三
明石とレーニン	四〇五
弱い勇士	四一三
ある艦のある日	四二〇
夜襲	四二七
二月三日の夢	四三七
パパ・ママ教育	四四三
彼女の哲學	四四八
街の潜航艇	四六〇

中短篇小說集 下

新釋四谷怪談

一

伊右衛門は、御存じの如く貧乏である。又、さうして、御存じの如くいゝ男である。従つて、伊右衛門がお岩に惚れてゐるよりも——いや、伊右衛門は少しも惚れてゐないにお岩は、命以上に惚込んでゐる。たゞの夫婦仲、つまりよく釣合の取れてゐる夫婦でさへ、一方が嫌になつてゐるのに、一方ばかりくつついてゐると、悲劇といふものは起り易い性質のものである。

それが、伊右衛門は多分の美男子と少々薄情とをもつてゐて、お岩が多分の濃情と、少々人並より劣つた顔をしてゐるから、破綻の生じるのは當然の事である。かうした釣合の餘りとれない夫婦が釣合のとれぬ位、女に金子、持物の有つた間はよかつたが、それがだん／＼釣合が取れてきて、お岩も伊右衛門も朝から晩まで、傘を張らねばなら

なくなつてきたのであるから、少し事がむづかしくなつてきた。

伊右衛門は大抵朝から、むつつりとして傘を張つてゐるが、お岩は、やさしい言葉をかけて欲しい、何うして近頃は、あんなにつんけんするのだらう。たまにはあの當時の如く、晝間でも接吻してほしいと

「ね——あの——」

と、側へ寄ると

「忙がしいのに——あつちへ行つてろ。」

と、一言で拒絶されてしまふ。夜になつたら——と思つてゐると、ふいと出たつ切りで戻つて来ないし、戻つてくると、すぐ臥てしまつて小々起したぐらゐでは到底起きないし、無理にゆすりつゝ耳許で

「ね——」

と云ふと

「うるさい。」

と、もう忘れる位、睦まじくした事もない。お岩は、何うも、芝居で——それも大抵、梅幸のすらりとした姿で出

るから、瘦形のやうであるが、私は小肥りしてゐて、可成り精力的であつたと思ふのであるが、もう十日も洗はぬ髪を、亂れたまゝにして、垢づいた襟、下品な手——何うかして蒲團代だけ傘を張りたいと、時々さう思つて一生懸命になるが、大抵は酒に化けて中々さういふ工合にならない。

伊藤喜兵衛の娘が見染めてゐると、秋山長兵衛から聞いた時、長兵衛の性質と、自分の貧乏とをよく知つてゐる伊右衛門は、美男子だとは信じてゐても、本當にしなかつたが、それでも自惚れだけは長兵衛が歸るとすぐ出てきたので、機があつたら、どんな娘か見てやらうと思つてゐると、今度は喜兵衛の家の仲間から

「旦那様、邸のお嬢さんが、貴方に——」

と、聞いたので、それから後はいよくお岩が邪魔になつてきた。

二

「民谷の嬢は物になるまいか。」

「あゝ、あれか、さうだな、反つていゝかも知れぬ」

「拙い面だぜ。」

「面で稼ぐのと、稼ぎ上手と二手あるからな、お岩は少し仕込むと、望み手はあるぜ。」

秋山長兵衛は、風車にさう聞いてその足で民谷浪宅へ出てきた。

「儲けさせてくれよ民谷、この間の一件さ。」

「本當かい。」

「これだけは本當さ。」

「だが——」

「いやそれだ、今風車の所で、賣れるかつて聞いたら、買つてもいゝと云つてたよ、賣つちまへ、俺の爲めに辛抱してくれ、つてな事を云へば承知するよ。」

「それはするだらうがね。」

かう云つて、反つてその方があの濃情者には適材適所かも知れぬと思つたが、一寸嫌な氣もしないでは無かつた。

「ぢや、話してくるよ。」

「まあ待て、人の女房を賣りに、長兵衛、貴様位友達甲斐の無い奴はないぞ。」

「有りすぎるからだよ。」

「この間の事だつて——」

「いや、總て一切合財、今度で差引をつけてしまふ。金のある、お嬢さんを貰つて、化物を追拂ふ——」

「叱つ、大きい聲をするな。そんな事聞くと本當に化けるよ、彼奴は——」

「俺ん所も、角を出して、化けるの化けんの、色男つて辛いのだ。」

「色の下に黒がつく奴だらう。」

「色に苦勞はつきものさ——何んしろ早くきまりをつけてくれ、お前がつけなけりや、俺が、ばつさりとやつちまふか。」

「持つて行つちまへ。」

「山の神は一疋でも結構すぎる——ぢや頼む、今夜寝物語にでも片付けてしまへ。」

「伊藤の口は嘘ちやあるめえな。」

「秋山長兵衛は食はねど武士だ。」

伊右衛門はその夜、久振りでしんみりとしてゐた。

「何うかしたのかい。」

「俺らあつくく嬢になつた。もう明日から傘も張るまい。」

「何うしたの。」

「俺あ當分、何つかへ奉公でもして——」

「お前別れる氣かい、えゝ、ちよいと——」

「お前はすぐ疑ふんだな。」

「いえ、疑やしないけど——」

「何つか江戸で仲間でもして、七日か十日に一度逢つてりや、かう貧乏暮しもせなかつて済むし、御互に小金でもためて、商賣でもしようかと——」

「本當にそのつもりかい。お前さんのお武家姿もいゝが町人になつたら粹だらうよ。」

「浮いた話ちや無いよ——」

「で、何うするつて——」

「お前も口を見つけてだ。俺も明日から口入屋へ行くが。」

「妾は何うするの。」

「お前何んでも辛抱してくれるか。」

「お前さんさへ別れなけりや——ね。」

「別れる位なら相談しずいふいと出てしまふよ。」

「口の當はあるのかい。」

「長兵衛が、あいつ顔が廣いから任さうと思つてゐるんだ。」

「秋長かい、あの悪黨、女郎にでも賣るつもりかい。」

「女郎はいやかい。」

「嫌さ。」

「俺の爲めにでも——」

「外に何も無けりや仕方が無いけど——妾が探してみよう。」

う。

「探すにしたつて、草履も入りや、腹もすかあ、長つべに任せておきや、彼奴の身錢だ。」

「どうね。」

三

地獄宿の主人、風車が鑑定したのは間違つて無かつた。

精神的貞操なるお岩は、肉體的娼婦で、顔の少し位いゝの

よりもよく流行つたし、お岩にしても、心に伊右衛門を思

ひ乍ら、何う反抗もできなかつた。そして暫くは無事であつた。

だが、伊右衛門が十日目にくると云つたのに一月経つても来ない事は、身體に少し暇のある時に、堪へられぬ嫉妬の念を起させた。そして、嫉妬しつゝ、ずる／＼と商賣してゐる内に、二ヶ月程経つてしまつた。そして、少し金が多まつたので愈々逢ひたいと思つてゐると、自分の家の元の召使、仲間角造の袖を引いてしまつたのである。

「奥さん——これは。」

お岩も一寸困つたが、長い貧乏と、この生活とで、逃げ走る事もしなかつた。そして

「たうとう民谷も暮せなくなつてね。」

と云ふと、角造は

「別れたのでは無いのですか、へえ。」

「何うしたといふの。」

「何うしたつて、あの民谷様は、伊藤喜兵衛つて、小身だが、物持ちの家へ嫁養子に入込んで——」

「本當かえ。」

と、云つたお岩は、何うしてかう變るのかと思ふ位に、物凄顔して

「女は——」

と、聞いた。

「お梅つて、十八になる一寸綺麗な方で、何んでも女の方から惚れて、好んでもらつたらしいですよ。」

「口惜しい、だまされたんだ。畜生つ、このまゝで居るものか。」

「奥さん、さう——氣を静めて。」

「妾しや、口惜しいつ。」

「御尤もですが——まあ落ついて。」

「口惜しいつ。」

唇から血が少しづつ滲出て、身體が、おこりのやうにがたがた慄へてきた。角造は大變な事になつた、氣でも狂はんといふが、と思つてゐると、眼付が變つて、瞳が一所へ寄つてきて異様に光つてゐた。ぶる／＼慄へてゐた手のだん／＼上へ慄へつ／＼上つてきて、握こぶしが蒼くなる位に力がこもつてゐて、身體が少しづつ前へ傾いてくると共

に、口を少しづつ開けて、

「おのれつ。」

と、その口は眞赤で、聲と共に血が飛んだ。そして、爪さきでぐつと立つたかと思ふと、双手が握みかゝるやうに揚つて、眼が一方を凝視めたまゝ、ふら／＼と風の如く、そして可成りに早く歩みかけた。

「奥さん——」

と、云つて、引留めようと袖をもつと、無言で拂ひのけた力は人間業で無く、きつと振向いた顔も、人間で無かつた。角造は手を離して蒼白になつて、

「堪辨して。」

と叫んだつもりが咽喉から出なかつた。お岩は風の如く走つて行つた。通りがかりの女が、叫聲をあげて家の中へ走込んだ。男が、ちらりと見るなり、顔を蒼くして、二三間はた／＼と走つたりした。

四

「思出した。」

と、云ふと、すぐにそれは、

「戀しがつてゐる。」

ことゝ、女はよく云ふ。お梅も、暫くして慣れてくるとよく伊右衛門に、

「思出して爲さるの。」

と、云つた。丁度、今日は、風邪の氣味で、頭が重いから、打水した庭を眺めてぼんやりしてゐると、ふと、いつもとはちがつて、

「何うしてゐるか知ら。」

と、可哀さうのやうな思出し方をしてしまつた。そして心の底から、

「濟まないな。」

と、感じた。と同時に、何かしら不安氣な、蒼白い光が頭の底でぴりとしたやうに、思つたが、風邪のせゐだらうと、そのまゝ庭を眺めてゐると、八つ手の葉の繁みのうしろに、お岩が立つてのぞいてゐるやうな氣がしてくるし、何んとなく氣味悪いので立上つて奥へ入らうとすると、垣根越しに、光り物が一つ流れたやうな、流れぬやうな――

流星の大きいのか、たゞそんな感じがしたのか、もう一度見定めようとすると、もう殆ど暗くなり切つた垣外には、向ひ家の大銀杏が、暗に聳えてゐるだけであつた。

後を振向くと、伊右衛門はさつと顔色をかへた。お梅が黙つて立つてゐるのであるが、夕化粧を濃くして、白く浮出てゐる上に、黙つて突立つたまゝであつたから、それを見た刹那、

「お岩、濟まない。」

と、又、ふと感じたが、お梅と判ると馬鹿々々しい氣がして、

「何を立つてゐる。」

と云つた。

「お岩さんの事を思出してなさるの。」

「馬鹿らしい。」

「でも、怨んでゐなさるわね。」

「何うだか――喜んでゐるだらうよ。」

「薄情者ね。」

「薄情者に誰がした。」

かういふ會話をしていると、お梅よりも伊右衛門は、安くて仕入れた有り古しのやりとりを知つてゐた。そして、さういふ下町風の物の云ひ方を知らないお梅には、粹に聞えて——多分嬉しかつたのだらう、笑ひ乍ら、

「ね——」

と、云つて首を傾けた。これしか知ら無い媚の手段である。この程度の女を操縦するのは譯の無い事であるし、女はしばし薄情な男を反つて好く事があるから、お梅にとつて伊右衛門位、世の中廣しと雖も優れた男は無いといふ事になつてゐた。

「旦那様、秋山様が——」

かう云つて女中が次の間から顔を出した。伊右衛門は苦い顔をしつゝ、

「又か、彼奴——」

と、云つた時、天井がどつかで、ギツと、木の軋む音がした。一寸大きい音で、お梅は大仰さうに

「あれつ——何でせう。」

と、女中に二人の睦まじさを見せつけるやうに伊右衛門

へ寄添つた。

「通しておいてくれ。」

と、云つた時、又ばたんと、蛇かなんかと、天井裏へ落ちたやうな物音がした。

五

「何うも、民谷、その物凄さつたら——」

「彼奴め、馬鹿な、何うしてそんな所へ落つこちやがつたのだらう。」

「暗くて踏外したのだらうかな。何んしろ、あの泥深い溝へ眞逆様に、脚が二本にゆつと出てゐるだけだつたて云ふが、額を打つたのだね、裂けて、肉がちぎれ上つて、口を開いて、骨が見えてゐるのさ。」

「お梅、濟まないが、熱が出てきたらしいから掻巻をかけてくれぬか。」

「病氣かい。」

「風邪らしいが、どうく寒くつて——」

「齒が折れてゐるし、額から頭へかけて半面擦剥いて——」

「もう判つたよ——」

「餘りいゝ氣のしないものさね。俺のやうな悪黨も一寸氣の毒に思つたよ——時に、民谷、こゝへ入つてから貴公、意氣地が無さすぎるぜ。いくらお梅が新鉢の、美しいのと云つたつて——」

「いや、さうぢや無い。氣が弱くなつたのだ。貧乏してゐる内は、反抗心があつたがね。一寸一安心といふ形で——お梅位に參るやうな——」

「伊右衛門とちがふか、時に少し有るかい。」

「又か。」

「お岩の死んだ事を知らせただけでも——おやつ、何か光つたぜ。」

かう云つて秋山が庭を指して

「誰か居るのかい。」

と、聞くので、伊右衛門も振向くと、そこは暗闇だけで、何の影も無かつた。

「居ないよ。」

「融通してくれ、少しでいゝから——あれつ、可怪しいぞ。」

お岩め、怨んで化けたかな、又光つたよ。」

「何か外の火だらう。」

さう云つてゐる時、お梅が掻卷をもつてきた。

「有難う——」

と云ふと、秋山が、にやりと二人をみて笑つた。

「羨ましいな、へー——え、おい、いくらでもいゝよ、一寸でいゝんだ。」

「妾、差上げますわ——」

と云つてちらつと民谷の顔を見ると、伊右衛門は眉をひそめた。

「ほんの、少し。」

と、手を延して差出すので、受取らうとした時、がたと

と、鼠の姿も、風も無いのに佛壇の位牌が倒れて、倒れるはずみ、蠟燭を倒し、それがお供物の紙に燃ついた。

「あれ、誰か早く来て。」

と、叫んだ時、長兵衛が走つて行つて供物の紙を、縁側へ抛出した。めらくと紙は巧に燃えてゐた。

「何うも頭が痛い。」

「早く寝るがいゝ、お梅さん、待遠しいだらうから、仲人は宵の内と、そろ／＼お暇するとせうかな、いや、いろいろと有難う。」

六

伊右衛門はうつ／＼と眠つてゐた。眠つてゐるやうな、覺めてゐるやうな、周圍の物が判る時もあるし、時々は確に眠つてゐる時もあるやうだし、時刻も、場所も——時として、傘を張るんだと思つて、はつと目を醒す事もあつたり、夢と現の境を、次々に廻轉させてゐた。

「冷しませうか。」

と、お梅が云つたけれど、伊右衛門はよく眠つてゐらしく返事をしなかつた。亂れた濡髪が額へ振りかゝつてゐるのが、もう三十すぎた男であつたが、二十臺の色氣があつて、お梅は毛をなぶりつゝ、看病の事よりも、いろいろの楽しい事を思出したり、描いたりしてゐた。

「誰が？——嘘だ、ちやんとかうしてゐるぢや無いか。」

と、伊右衛門は大きい聲をした。お梅はびつくりして額

から手を離したが

「何んです？——えゝ、もうし——もうし。」

と云つて、ぢつと目を見てゐると、眉がじり／＼險惡な色をみせたかと思ふと、肩が慄へてきて

「除けつ。」

と云つた。そしてその次の瞬間、さつと半身を起したので

「あなた——」

と、肩へ手をかけて、顔をのぞくと、臆が寄つてゐて、紫がかつた青さの顔色の頬をひきつられつゝ、拳をぶるぶると慄はせてゐた。

「お父さん。」

と、大聲を立てると、暫くして襖が開いて喜兵衛が入つてきた。そして伊右衛門の様をみてゐたが

「熱に浮かされてゐるのだらう。靜に、ぢつと抱き下ろすがいゝ。」

と立つたまゝで云つた。お梅が伊右衛門の肩へ手をかけると喜兵衛は